

堺余話

池本 正純

今回の調査旅行は関空で解散となったが、私は再び堺にむかった。茶の文化発祥の地としての堺を女房に連れられて「見学する」ためである。帰る方向が共通する何人かの所員が関空から電車で同乗した。そこに樋口博美所員が含まれていたので方向音痴の私としては大船に乗った気分ではあった。彼女はいま調査研究の対象の一つが堺だと伺っていた。この数年毎年のように学生たちを連れて堺に滞在されるそうである。

その日、午前中に立ち寄った「めっけもん広場」(JA 紀の里) で、つい衝動的に買ってしまったイチジク 1 パッケージと巨峰 1 パッケージの入った大きな買い物袋が、旅の途中にしてはいかにも邪魔くさく私の片手を占領していた。福島義和所員に至ってはイチジクが 1 パッケージどころではない。4 パッケージがセットに入った横広の大きな段ボール箱の入った袋を手に提げている。「よっぽどイチジクが好きなんだナ…」と思いつつ、「それにしても、この持ちにくい荷物をどうやって家まで持って帰ろうというのか？」他人ながら心配をした。あとで気がついたことだが彼は大阪の実家に帰る途中だったのでどうってことなかったのだ。

あくまでも問題なのはこの私だ。食い意地が張っているばかりについ余計な荷物を旅の途中で作ってしまった。不安定な荷物を不格好にぶら下げている自分の姿が、恥ずかしくもあり、恨めしくもあった。

女房とは夕方シティホテルサンプラザで待ち合わせすることになっていた。私がネットで何気なく予約したものだ。というか比較的安かったのである。ところが二日前、社会科学研究所堺調査旅行の初日の夕食会がこのホテルで行われたのには驚いた。「宿泊先がリーガロイヤルホテルなのになんで？」と思ったが、理由はどうも樋口所員がいつもこのホテルを拠点に調査をされているということがあるらしい。ホテルのマネージャー氏の愛想のいいことと云ったら、胸の位置で揉み手してこれ以上ないというぐらいの笑顔で迎えてくれた。「そうか…樋口さん、このホテルで顔なんだ」。後になって納得した。夕食が終ってホテルを引き上げるとき、二日後に宿泊しにくることを告げておいた。一瞬マネージャー氏の顔がほころんだ。

関空の駅から南海本線堺駅にどうして着いたのかわからないまま、駅を降り、樋口所員に駅からホテルまでの行き方を教えてもらい、無事サンプラザに着いた。通された部屋は畳部屋であったが不必要なぐらいやたらと広い。特別に用意された部屋なのだろうか。持ち歩いていた果物をすぐに冷蔵庫に入れておいた。

やがて女房が着き、少しだけ冷やしておいたブドウとイチジクを食べてみた。イチジクは甘

みと香りが濃く、生まれ故郷の因島を離れて初めてうまいイチジクに巡り合った感じがした。「うまいのなんのってイチジクは和歌山に限る！」とその後ずっと言い続けている。巨峰も皮がぱりぱりしてとてもおいしかった。やはり新鮮だったのだ。苦勞して和歌山から持ち運んできたかいがあったというものだ。いま、農家の人が直接売りにくる市場（広場）が全国的に盛んになっていると聞くが、理由がわかったような気がする。JA 紀の里のめっけもん広場でも、大勢のお客が押し寄せてくる店内に、自分の名前を書いた産物をみずからカートで運び入れる農家の方の誇らしげな顔がまぶしかった。客がおいしいからと競って買いにくる舞台こそが、丹精込めて働くための最高の励みなのだ。

堺駅の近くのこれと言って特徴のない小料理屋で夕食をとったが、これが当たりだった。刺身の切り身は大きく新鮮だった。煮物・焼物も材料がたっぷりと使っており、はんなりとした薄い味付けがしてあった。堺の魚介類の豊富さ・新鮮さと大阪の料理のレベルの高さを改めて感じた次第である。ついでに二次会のつもりで、二日前に堺市の職員の方に案内してもらった魚市場の中の「屋台店」に行ってみた。七輪の炭がまだいこってなかったがすぐに準備できますからと店の兄ちゃんに言われ、屋外のテーブルの席に着いた。この日もサザエの壺焼きは最高であった。その兄ちゃん達、生まれは堺かと思いきやなんと九州博多出身だという。

「俺は瀬戸内海だ」と云いながら、話が仁徳天皇陵にもおよぶ。「邪馬台国が北九州か近畿かでよく論争するが、俺に言わせれば、大陸から見れば北九州は日本の門、堺は玄関、その間の瀬戸内海は庭みたいなもんだ。全部ひとつ屋敷の中だ。」と酔った勢いが止まらない。

女房が「またはじまった。この人酔うところやって人にいい加減な話をし始めるの。店の迷惑だからもうそろそろ帰りましょ！」と命令口調。「ほかに客なんかいないからいいんだよ」と逆らってみたが、結局ホテルに連れ返されてしまった。

翌日、食堂で朝食をとった。シェフは意外にも若い長髪のイケ面の男。客が少ないのか女房が美しいからか何かと親しげに話しかけてくる。ひまにまかせてこちらも応じていると、なんと驚いたことに、二日前のマネージャー氏が揉み手をしながら現れた。挨拶やら世間話が一段落してもなかなか立ち去らない。そして「今日の御予定は？」と聞いてきた。

「これと言って予定はないのですが、今回夫婦であらためてここに来たのは、お茶の文化ゆかりの地を探索しようというのが主要な目的。お茶の文化あるところ必ずうまい和菓子がある。女房は和菓子が大好きで、とにかくいろんなものを食べ歩きたい。しかし、一人前まるまる食べていたのでは食べ切れない。食べるのはほんの一口で良い。その残りを食べるのが私の役割なのです。私は歩く残飯整理バケツなのです。京都の街も何度か女房について自転車で回りました。京都の夏は暑い。薄い頭に直射日光がこたえました。今日もその覚悟です。」

そう言ったら、待ってましたとばかり、「奥様、なんというお優しいご主人ではないですか。

じゃ、先生、午前中はこの私に任せてください！ご案内したいところがございます。」

ホテルの前から業務用のちょっとくたびれかけたワゴン車に乗せられてたどり着いたのは方違神社。古文の授業では「かたがえ」と習ったはずなのに、ここでは「ほうちがえ」というらしいなどと二日前に教わったことをそのまま女房にオウム返し。マネージャー氏は賽銭を投げ手を合わせるが、われわれはクリスチャンなのでそのまま通り過ぎた。

思いもよらぬ展開がそのあとに起きた。方違神社に隣接して立派な構えのお菓子屋さんがある。看板に江久庵とある。マネージャー氏、ワゴン車のほうに戻るのではなく、その店の中に入って行く。「方違いだぞ」と心の中で叫ぶ。彼が手招きするのでいぶかりながらついて入る。金粉を表面にあしらったカステラが目に入った。「高そう！」と少し警戒。しかし店のほうにはすでに連絡済みの様子で、まもなくきちっとしたスーツを身にまとった若くて賢そうな女性にこやかに現れる。「いらっしやいませ。どうぞこちらへ。」と店の奥へと案内される。そしてエレベーターで三階へ。

少し暗い廊下を通り過ぎながら目に入るびっしり並んだ食器棚とそこに収められている道具の数々、みな高級品ばかり。やがて廊下の最後にたどりつき案内の女性が扉を開けると、まぶしいばかりの屋外の光に包まれた。店の真裏のテラスに出たのだ。思わず「ア—ッ」と声が出た。すぐ目の前に、濠に囲われた大きな前方後円墳が広がる。反正天皇陵だと後でわかった。まるで店の裏庭だ。それぐらい間近なのである。言葉にならない上ずった声を吐き出しながら、借景としてこれ以上はないと思われる大きな古墳の不思議なたたずまいに見入った。人工物でありながら限りなく美しい自然の一部でもあった。濠には驚も舞い降りるという。

しばし見とれて我に返ったころ、二階の宴会場に案内された。広い大きな洋間である。照明はつけず庭からさす光だけであったが古い大きな絵が壁に掲げられているのが見えた。二曲一双の屏風絵である。巨大な城郭のほとりに牛車や輿そして無数の人からなる行列が描かれている。豊臣秀吉が京都に建てた聚楽第への後陽成天皇の行幸の様子を描いたものという。この茶会の席で茶頭を勤めた千利休も描かれているという。「この絵のどこにいるでしょう？」と案内の女性の質問。「まるでウォーリーを探せだな」といいつつチャレンジ。意外に早く見つけた。聚楽第で天皇の到着を待っている利休の姿が結構目立つように描かれていた。じつはこの絵は模写で、実物は堺市博物館にあるということであった。

この旅から帰って二週間後、聚楽第行幸の様子を描いた六曲一双の屏風が新潟県上越市でもあらたに発見されたとの新聞報道をたまたま目にした。今回の堺の旅があればこそ見えてきた記事であった。

さて、屏風絵から目を裏庭に転ずるときれいな数寄屋造りの屋根が眼に入る。この家は何かとっていると、次はそれに案内してくれるという。なんと利休の茶室を復元したものだとい

う。朝雲庵と名付けている。その茶室の庭で不思議なものに出会った。加賀のほうから送られたという灯籠である。主柱の石に横から四角い穴が空いている。この穴に横から石の棒を差し込めば、十字架になるのだという。つまり、隠れキリシタンの道具なのである。どういう経緯でここにあるのだろうか。じつは同じような燈籠が、あとで訪れた南宗寺の庭にもあった。なんとなく気になる灯籠である。

店の特別な案内はここで終わった。せっかくなので1階奥の「利休」というお茶処で休憩がてら、カステラとお茶をいただいた。風情ある茶室とその庭を眺めながらのくつろぎのひと時であった。

江久庵のお店を出た後、マネージャー氏が連れて行ってくれたのは、仁徳天皇陵、そして、くるみ餅で有名なかん袋である。胡桃ゆべしではなく白玉だんごをどろどろのうぐいす豆のあんをかけてくるんだものという意味であった。あんが甘すぎてかき氷をかけてちょうどよいくらいだった。

ここまで来たところで、お昼になり、ホテルに戻った。あとは、ホテルで自転車を借り、本格的な和菓子行脚、いや、残飯整理バケツとしてのお伴の旅となった次第である。